

■天然ガス

シェールガス Shale gas

深くて固い岩盤にたまっているガス。技術の進歩で安いコストで取り出せるようになった。

天然ガスの採可埋蔵量は 60 年以上で、原油より豊富だ。しかし埋蔵地域が、ロシア、イラン、カタールに集中し、それら 3 カ国だけで、世界天然ガス採可埋蔵量の 50%を超える。

世界の天然ガス消費量		世界の天然ガス埋蔵量	
単位：十億m ³		単位：百億m ³	
アメリカ	646.6	ロシア	4,438
ロシア	389.7	イラン	2,961
イラン	131.7	カタール	2,537
カナダ	94.7	トルクメニスタン	810
中国	88.7	サウジアラビア	792
日本	87.4	世界計	18,749
世界計	2,940.40		

出典：「BP Statistical Review of World Energy 2009」

=>アメリカがイランにこだわる理由はここだった。

■鉄鉱石

鉄鉱石の世界需給を巡る問題として、資源メジャーの存在が挙げられる。他の鉱物資源にも資源メジャーは存在するが、鉄鉱石の状況は特筆される。ブラジル資本のヴァーレ・ド・リオドセ社、英、豪資本の BHP・ピリトン社、そしてやはり英、豪資本のリオティント社の **3 社**で、世界の鉄鉱石供給源の **80%**を押さえているのだ。

鉄鉱石供給元が大集約される過程で、鉄鉱石の市場価格が高騰した。ユーザー側である鉄鋼メーカーもそれに応じて、複数社の合併や資本提携、経営統合などを通して大規模な集団にまとまり、鉄鉱石資源メジャーに対抗する動きを加速させている。

■レアメタル

レアメタル（希少金属）というのは日本独自の呼称で、その範囲は漠然としている。レアメタルの他に、レアアース（希土類）と呼称されるものもある。クロム、マンガン、ニッケルのように、独自の鉱石として採掘可能なものもあるが、多くは別鉱石の中にわずかに含まれるため、大きな単位での採取が不可能だ。地球全体での含有量は決して稀少ではないが、採取、精錬にコストと手間がかかるため、レアメタルと呼ばれている。

■ウラン

平和利用におけるウランの用途は、主に原子力発電用燃料だ。クリーンエネルギー化のため、各国は原子力発電の強化を進めてきた。そのため世界のウラン需要は、逼迫することが以前から懸念されていた。2006 年段階ですでに 40%の供給不足となっており、不足分はリサイクルによるウランの二次利用や、在庫の取り崩しなどで賄われてきた。

■食糧インフレ

往々にして**資源価格の高騰**は新興国の需要増が原因だと指摘されるが、世銀は2011年4月になって食糧価格の高騰は世界需要の拡大によるものではなく、むしろ**エネルギー価格とバイオ燃料への需要増**によるものだという報告書を発表した。

・・・

非常に大まかに80～90年代、そして2000年に入った当初までは、世界の穀物価格は落ち着いていた。しかし2004年以降、穀物の国際価格は突如急騰を見せるが、その背景にあるのが原油価格の高騰ということになる。

原油価格が高騰するとなぜ食糧価格へと波及するのか。主に2つの理由が存在する。

第一にあげられるのが、現代農業には欠かせない**化学肥料の値段の高騰**である。尿素やアンモニアなどの化学肥料を作るには、エネルギーが必要になる。例えば日本の財務省貿易統計をみると、原油価格が2倍になった2007年7月～2008年の7月までの間、尿素・硫酸アンモニウムも2倍になっており、エネルギー価格がダイレクトに化学肥料価格に影響しているのがわかる。

第二に、**原油高になるとバイオ燃料の需要が増す**ことになる。バイオ燃料の原料であるトウモロコシの価格が高騰すると、トウモロコシを作った方が儲かることになり、それまで小麦や大豆を作っていた農家はトウモロコシ栽培に切り替える。すると今度は小麦や大豆の供給が圧迫され、値段上昇へとつながることになる。こうして原油価格高騰が間接的に穀物価格全体を押し上げる状況に陥る。そして、それを見込んだ**投機資金**がこれらの市場に流れ込むという仕組みである。

純粋な穀物への需要が増えているのか、それともバイオ燃料として利用するための穀物需要が増えているのか。世銀の報告書では、食糧としての穀物の需要は2000年代に入ってからむしろ低下しており、代わってバイオ燃料への寄与度が増していると指摘する。世界の流動性資金が原油市場に流れ、そして穀物市場へとめぐりめぐっている状況だ。

■バイオ燃料

収益を最優先させるために、「**食料を燃料に回す**」というバイオ燃料の発想は、原油価格が落ち着かない限り今後も継続していこう。今後、パンヤカップ麺などの食料品が値上りする中、主食のコメが家計の味方となることは間違いない。

・・・

実は海外市場で原油が最高値を付けた2008年の時点でも、ガソリンの国内価格はこれまでの最高値である1982年をはるかに上回ることはなかった。この背景には、変動相場制以降、長期間にわたる為替市場での円高がある。1ドル=360円で始まった為替レートは、2011年5月現在、1ドル=80円と4分の1以上も米ドルの価値が減価（円の価値が4倍以上上昇）した。円が高くなれば、その分安く海外製品を輸入できる。

“円高は悪”というイメージが付きまとうが、実は日本にとって円高こそがこの**資源争奪戦下での唯一の救世主**なのである。

■水資源

日本人は長らく、水に恵まれた国土を誇りにしてきた。十分な降雨に恵まれ、河川の流量も豊富で水質もよく、特定地域に一時的な水不足はあっても、全体的に見れば、国民を潤すのに十分な水の供給力を備えてきた。

国内の水需給だけなら、それでいいかもしれないが、日本の食糧自給率が低いことを考える必要がある。他国の農業に大きく依存しているということは、この分の水供給を受けているのと同じことであり（**仮想水**という考え方）、日本は水を自給自足しているとは言えない。一人当たりの水資源量を計算すると、日本は世界平均の40%程度と低く、**けっして水資源大国を誇るわけにはいかない。**